

27	松原市立松原第七中学校 外2校	19~21
----	-----------------	-------

平成21年度研究開発実施報告（要約）

1 研究開発課題

いじめや不登校の予防及び学校復帰支援を行うための小・中連携した教育課程とその指導方法・評価及び学校・教職員・生徒集団のあり方についての研究開発

2 研究の概要

松原第七中学校（以下、松原七中）がこれまで研究開発学校として開発した人間関係学科（略称HRS）の学習プログラムを改善し、小・中学校9年間の発達段階に応じた新設教科「人間関係学科（中学校；略称HRS、小学校；略称 あいあいタイム）」及び不登校生を対象とした「ほっとスペース」を設置し、いじめの未然防止や不登校の予防、不登校生の学校復帰を支援するための教育課程及びその指導方法や評価、学校・教職員・生徒集団の在り方について小・中連携して研究を行う。

また、その実践を通じてカリキュラムの有効性の検証を行い、不登校児童・生徒の小学校からの経年変化や長期欠席児童・生徒の欠席状況の変化等を分析する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

児童・生徒一人ひとりに対して、「学校での心の居場所づくり」をめざして、様々な学びのスタイルや、特色と魅力ある学校行事等の工夫・改善を行うことが、いじめや不登校を予防し、不登校生の学校復帰をめざすことにつながると考える。

そのため本研究では、

松原七中とともに、恵我小学校（以下、恵我小）・恵我南小学校（以下、恵我南小）においても、ストレスマネジメントやソーシャルスキルを系統的に学ぶ「人間関係学科（中学校：略称 HRS、小学校：略称 あいあいタイム）」を設定する。

中学校区の小学校と連携して、義務教育9年間の「人間関係学科（中学校：略称 HRS、小学校：略称 あいあいタイム）」の学習プログラムを研究開発する。

松原七中においては、完全学校（教室）復帰への中間ステーションとしての「ほっとスペース」を充実し、柔軟で、多面的な教育課程を編成する。そして、そこでのノウハウを小学校での取組に生かす。

以上の取組を通じて、いじめのない、いじめを解決できるような人間関係の向上と居場所のある集団づくり（学校、学年、学級）をすすめ、また、不登校生の学校復帰の道筋を明らかにするとともに、児童・生徒たちのストレスマネジメント能力の育成をはかる等、生涯にわたって活用できるしなやかな精神的基盤を培い、「生きる力」を育むことをめざす教育課程の研究・開発を目的とする。

（2）教育課程の特例

小学校3~6年で年間35時間の「人間関係学科（あいあいタイム）」の実施

（1~2年は教育課程を変更せずに、15時間のプログラムを特別活動で実施）

・開設時間は「総合的な学習の時間」より35時間を削減し、3年~6年で「人間関係学科」を年間35時間実施する。

なお、1~2年は教育課程を変更せず、特別活動等の時間内で15時間程度「人間関係学科」を

実施する。

- ・「人間関係学科」では、自己認識力、共感性、コミュニケーション力、問題解決力及び、ストレスを認識しコントロールする過程を学ぶストレスマネジメント等について、6年間のカリキュラムを系統的に編成し、計画的に実施する。

中学校全学年で年間35時間の「人間関係学科（HRS）」の実施

- ・開設時間は「総合的な学習の時間」より35時間を削減し、全学年「人間関係学科（HRS）」を年間35時間実施する。
- ・「人間関係学科（HRS）」では、自己認識力、共感性、コミュニケーション力、問題解決力及び、ストレスを認識しコントロールする過程を学ぶストレスマネジメント等について、3年間のカリキュラムを系統的に編成し、計画的に実施する。

4 研究内容

（1）教育課程の内容

A 新教科「人間関係学科（HRS、あいあいタイム）」の創設

新教科研究開発の特徴

- ・松原市立松原第七中学校区（以下松原七中校区とする）の全児童・生徒を対象に指導した。
- ・松原七中校区の全教職員がその研究開発に携わり、全教員が指導にあたった。
- ・幼・小・中11年間で育成するスキルを12のターゲットスキルとする。
- ・松原七中とともに、恵我小・恵我南小においても、ストレスマネジメントやソーシャルスキルを系統的に学ぶ。
- ・ストレスマネジメントなどの心理学的手法やグループエンカウンターなどの先行する研究や実践の成果に学びながら、行事・特別活動・道徳の時間・総合的な学習の時間などと結びつけて研究開発を進める。
- ・参加体験型（ワークショップ）の学習スタイルを中心に行なう。

新教科カリキュラムの作成

- ・校内授業研究、校内研修、松原七中校区人権教育研究会（以下、校区人研）の公開授業、校区研修、校区ワーキングチームの活動を通じ、七中においては、これまで研究開発した「人間関係学科」のカリキュラムを改善し、恵我小・恵我南小においては、「人間関係学科」のカリキュラム案を作成するための、プログラムづくりを行った。

B 不登校生を対象とした「ほっとスペース」の教育課程編成

不登校生への支援体制の強化

- ・不登校生等支援会議、「こころプロジェクト」等を通じて、継続的に不登校生の現状把握、支援目標づくり、校内連携組織の点検活動などを行った。
- ・不登校生への「こころ支援」「体験支援」「学習支援」を教職員、関係諸機関との連携のもとで実施した。
- ・校区不登校児童生徒支援会議において、年間欠席日数10日以上の児童・生徒の引き継ぎと登校状況の把握をおこなっている。

「ほっとスペース」での教育課程編成

- ・個に応じた教育課程を編成するよう工夫した。
- ・体験学習を中心とした人間関係学科の充実を図った。
- ・合科的指導方法を実践した。

(2) 研究の経過

第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の実態を分析し、育成する子ども像を明らかにするとともに、先進的な研究と実践についての調査・研究（3校合同プロジェクトチームの発足） ・教職員のカウンセリングマインドとスキルの向上をめざした校内研修会・校区合同研修会の実施 ・9年間の「人間関係学科（HRS、あいあいタイム）」の学習プログラムづくり ・中学校「ほっとスペース」のカリキュラム整備と、人的・物的両面の環境整備 ・2年次のカリキュラム等の検討及び年間指導案の作成 ・不登校児童・生徒への「心の窓にアクセス事業」活用の在り方 <人間関係づくりや学習支援プログラムの研究開発> ・地域、保護者、関係諸機関と協働した指導とそのネットワークづくり
第二年次	<p>カリキュラムの本格実施とデータの蓄積</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員のカウンセリングマインドとスキルの向上をめざした校内研修会・校区合同研修会の推進 ・9年間の「人間関係学科（HRS、あいあいタイム）」の学習プログラムづくり及び指導方法の確立と評価規準の作成 ・ひきこもり傾向の不登校児童・生徒への「心の窓にアクセス事業」活用の強化 <学習支援プログラムの確立や担当教員の育成> ・中学校「ほっとスペース」の指導方法の充実 ・地域、保護者、関係諸機関と協働した指導とネットワークの推進 ・中間まとめの研究発表を通して、研究の有効性の検証と最終年度の課題の明確化 ・最終年度の学習プログラム等の検討
第三年次	<p>調査・研究の実施と成果のまとめ、及び、報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9年間の「人間関係学科（HRS、あいあいタイム）」のカリキュラム・指導方法、評価規準のまとめ ・中学校「ほっとスペース」のカリキュラムや指導方法等のまとめ ・情報機器を活用した総合的な支援プログラムの確立と担当者の役割の確立 ・地域、保護者、関係諸機関と連携した指導の実践とまとめ (特に「ボランティア手帳」について) ・最終年度の研究発表会を通して新しく設定した教科等の可能性と課題について報告 成果と課題は報告集等にまとめて収録 ・人間関係学科実施における指導指針の作成

(3) 評価に関する取組

第一年次	<p>一年次に、調査・研究し、開発・整備したカリキュラムと学習環境などについて、校内で、検討・評価するとともに、運営指導委員会等研究者・関係諸機関などの評価を受ける機会を設ける。</p> <p>また、取組前後の児童・生徒や関係保護者の意見をアンケート等で集約し、次年度の実践に生かす。</p>
------	--

第二年次	<p>引き続き、児童・生徒や関係保護者の意見をアンケート等で集約し、取組の改善に生かす。</p> <p>また、二学期に中間まとめの研究発表を行い、研究者、専門家、保護者、地域からの評価をいただき、研究開発の有効性を検証するとともに、最終年度への課題を明確にする。</p>
第三年次	<p>二学期に最終の研究発表を行い、新教科「人間関係学科（HRS、あいあいタイム）」と「ほっとスペース」の取組を中心に、「いじめ・不登校を予防する、あるいは、不登校生の学校復帰を支援する教育課程と指導方法・評価、及び、学校・教職員・生徒集団のあり方について、小・中学校の連携した研究開発について、地域、保護者、研究者、関係諸機関など多方面から評価をいただき、新教科等の可能性と課題について整理し、報告する。</p>

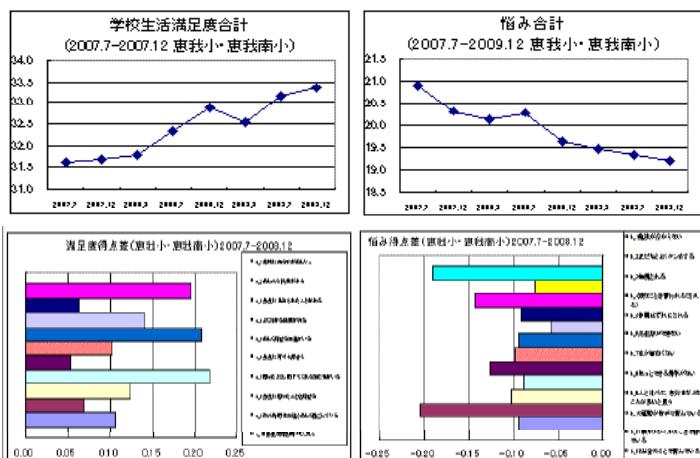
5 研究開発の成果

（1）実施による効果

松原七中では平成15年度より、恵我小・恵我南小においては平成19年度より、人間関係学科の効果を測定するために6つの領域からなる「学校生活調査（小学校4件法、中学校5件法）」というアンケート調査を児童・生徒対象に実施している。項目は、a 学校生活満足度 b 悩み c ストレス反応 d コーピング e ストレッサー f 自己肯定感（小学校高学年と中学校のみ）の6領域である。実施対象と実施時期は、小3～中3までは各学期末ごと、小1は3学期から各学期末ごととなっている。その他、人間関係学科実施直後の「ふりかえりシート」、各学期末に中学校で実施している「HRS自己評価」、学校教育自己診断（児童・生徒用）がある。保護者に関しては、人間関係学科アンケート（保護者用）学校教育自己診断（保護者用）を、教員に関しては、人間関係学科アンケート（教員用）学校教育自己診断（教員用）をそれぞれ12月に実施し、そのデータ集積から効果を測定している。

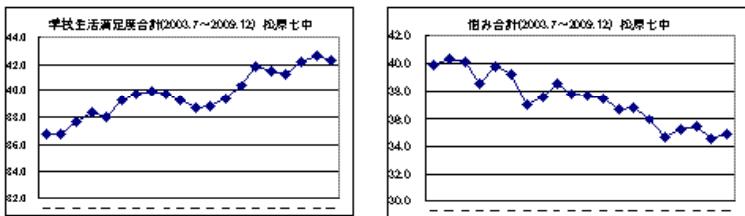
A 児童・生徒における実施の効果

学校生活満足度と悩みの得点推移より

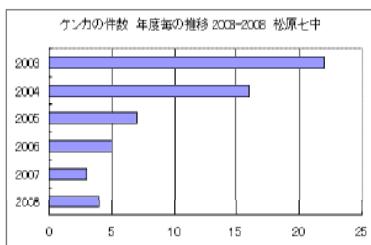


話せる」の3つの項目において、0.2ポイント以上の上昇を見せており、一方、悩み合計においても全ての項目において減少し、「b10 運動が苦手で悩んでいる」「b11 顔やスタイルのことで悩んでいる」の2項目については、0.2ポイント以上減少していることがわかる。

小学校においては、人間関係学科実施後の平成19年7月から平成21年12月までの恵我小・恵我南小の3年生から6年生までの全員の数値を合計し平均値を割り出した。学校生活への満足度と悩みの数値の推移をみた。学校生活満足度合計は増加し、それに比例して悩み合計が減少していることがわかる。項目別に見ると、学校生活満足度においては全ての項目が上昇し、「a3 先生にほめられたことがある」「a7 困ったとき、助けてくれる友だちがいる」「a8 先生に困ったことを

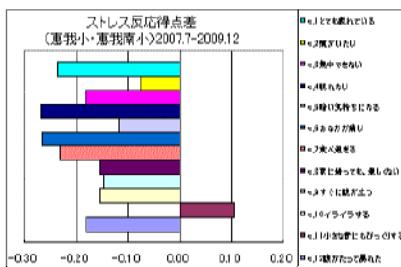


松原七中においては、研究開発の指定を受けて7年目ということもあり、平成15年度から平成21年度に至るまでの推移をグラフにした。平成18年度は、移行措置として人間関係学科の実施を20時間程度に抑えたということと、教員の大量異動等が原因で、いったん学校生活満足度の数値は減少しているが、改めて校区として研究開発に取り組み始めた段階で上昇し始め、本年度7月調査では、今までの最高値である42.6ポイント(50点満点)にまで到達した。平成15年度からおよそ6ポイント上昇し、質問が10項目なので、1つの質問につき0.6ポイント上昇したことになる。人間関係学科実施後、楽しいと思える学校づくりをめざしてきた結果が、生徒たちの学校生活に対する満足度を増し、悩みを減らしてきたと言える。

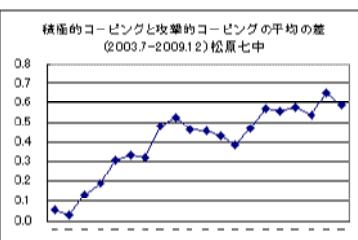


左のグラフは松原七中における暴力がからんだケンカの件数であるが、年を追うごとに減少してきた。かつては、市内でももっとも生活指導面で厳しい状況だった松原七中であったが、現在では、非常に落ち着いた学校に変容している。この人間関係学科の取組の成果を校区小学校と共有することにより、松原七中校区が豊かな人間関係に満ちあふれた地域に発展していくことを願うことが、校区として取り組んでいく。

ストレス対処



先行した松原七中の研究開発の結果から明らかになったことは、子どもたちの悩みやストレッサーは、心身及び行動面に大きく影響を与え、ストレス反応として子どもたちの中に表れるということだった。悩みやストレッサーとして子どもに認知的に自覚される事象と「c1 とても疲れている」「c10 イライラする」などの生理的・精神的・行動的に表れてくる事象との間には強い相関がある。(松原七中、平成21年12月調査においては、悩み合計 - ストレス反応は「Pearsonの相関係数で0.596、ストレッサー合計 - ストレス反応は0.577、1%水準で有意〔両側〕」という結果を得ている。)上のグラフは、恵我小・恵我南小のストレス反応における得点差である。12項目中11項目においてマイナスになり、合計点(5件法、60点満点)においては、1.33ポイント減少している。



松原七中においては、1年生の2学期に、ストレスマネジメント学習を展開し、その後、アサーティブな表現や主張、感情対処、リフレーミングなどの学習へとつなげている。その結果、上のグラフのようにストレス反応合計は減少傾向にあり、積極的コーピング(「d1 スポーツで発散する」「d2 友だちに相談する」「d3 家族に相談する」「d4 先生に相談する」の平均)と攻撃的コーピング(「d5 モノにあたる」「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人を叩く」の平均)の差が広がっている傾向にある。平成21年7月の調査では、その差が0.647とこれまでの最高値となった。これは、教員の相談力の向上によるものである。イライラしたときに「d10 学校を休む」子を登校回避感情をもつ子として位置づけて「d10 学校を休む」という項目と「d4 先生に相談する」という項目の相関を見たものが次頁の表である。参

しかし、コーピング差(積極的コーピング - 攻撃的コーピング)には明確な成果があらわれておらず、ストレス認知の観点だけでなく、小学生の発達段階においてはリラクゼーション等の手法が重要と言える。

考までに「3.どちらとも言えない」「4.あてはまる」「5.かなりあてはまる」と答えた子どもの全体に占める割合をつけ加えている。取り組み始めてから平成19年度までは、まばらにしか相関が出ていないが、平成20年度・平成21年度の調査には全ての調査にもれなく相関があらわれている(**、又は *)。登校回避の感情をもった子どもたちから教員へと「相談」のベクトルが発されているということをあらわしているのである。人間関係学科の実施やカウンセリングに関する研修の積み重ねや、教員どうしのアサーティブな関係性をめざした職場づくりの成果として、教員の中に安定した相談力がついてきたあらわれであると考えられる。

実 斎	Pearson の相関係数	345 の割合
① 2003. 7	0.026	16.7 %
② 2003.12	0.240 ** *	8.1 %
③ 2004. 3	0.118	10.2 %
④ 2004. 7	0.103	10.7 %
⑤ 2004.12	0.119	8.5 %
⑥ 2005. 3	0.114	15.0 %
⑦ 2005. 7	0.189 ** *	12.7 %
⑧ 2005.12	0.087	8.8 %
⑨ 2006. 3	0.227 ** *	10.9 %
⑩ 2006. 7	0.143 *	8.4 %
⑪ 2006.12	0.106	11.0 %
⑫ 2007. 3	0.025	13.3 %
⑬ 2007. 7	0.096	9.2 %
⑭ 2007.12	0.245 ** *	11.0 %
⑮ 2008. 3	0.096	13.3 %
⑯ 2008. 7	0.182 ** *	10.2 %
⑰ 2008.12	0.338 ** *	12.7 %
⑱ 2009. 3	0.101 ** *	11.2 %
⑲ 2009. 7	0.247 ** *	7.7 %
⑳ 2009.12	0.139 *	9.0 %

* 相関係数は 5 % 水準で有意(両側)です。

** 相関係数は 1 % 水準で有意(両側)です。

不登校への取組

不登校の未然防止の人間関係学科の開発とともに、研究開発の課題の一つとして不登校生等への支援がある。各校で校内不登校生等支援会議を設置し、校区不登校生等支援担当者会議、校区不登校児童生徒支援会議を開催し、校区で一貫した不登校生等への支援と、関係諸機関と連携した支援をしている。教員の支援は、担任のみに任せるとではなく、学年代表と担任が情報を共有し、学年会議での話し合いを経て各校の不登校生等支援会議で話し合われる。不登校生等支援の柱は校内不登生等支援会議である。学校の中心メンバーはもとより、学年代表、養護教諭、カウンセラー、アドバイザーなどの各校の支援スタッフが結集し、支援が必要な子どもたちへのアセスメントと支援策を協議していく。結果として、管理職も含めた複数の教員の支援とカウンセラー・関係諸機関から支援が必要な子どもへ届く

ことになる。左のグラフは小学校における年間10日以上の欠席者の率のグラフと中学校における長欠生と不登校生の率のグラフである。恵我小・恵我南小では、年間欠席日数10日以上の児童を支援が必要な子どもとして位置づけ、遅刻の実態も加えて把握していくことで、中学校へつないでいくという取組を行っている。松原七中では、病気などの長欠生も支援が必要な子どもとしてとらえ、支援を行ってきた。不登校生等の学校復帰のための家庭と学校との中間ステーション「ほっとスペース」では、現在1名(3年女子)が利用している。1年3学期から引きこもってしまった彼女が2年生より「ほっとスペース」での勉強をはじめ、部分的ではあるが学級復帰を果たし、現在では高校への進路も決定している。



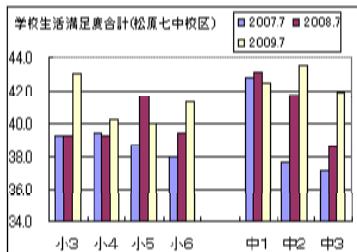
いじめ未然防止の取組

学校生活調査の中にある「b4 無視される」「b5 嫌なことを言われる(される)」「b6 仲間はずれにされる」「e17 人からの陰口、うわさ話をされること」を合計した点数を被侵害得点(小学校16点満点、中学校21点満点)として位置づけて、その推移を見た。小学校も中学校も増減を繰り返しながらではあるが減少傾向にあることがわかる。松原七中では、平成19年度から10月の教育相談(二者懇談)に向けて「ほっとアンケート」という、子どもの生活度、被侵害度、キャリア意識をはかるアンケートを実施している。学校生活調査の被侵害得点とも兼ねあわせて、いじめ未然防止に関わって、子どもたちと教員がつながる手段として活用している。日常の相談活動とあいまって、子どもたちと教員のつながりが強まっていくことで、子どもたちの中にあけいじめに対して、大きな抑止力となっていることはまちがいない。さらに、子どもたちは、一つひとつの人間関係を構築していく作業に人間関係学科を通じて取り組み、自立する力



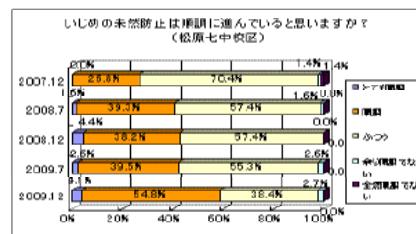
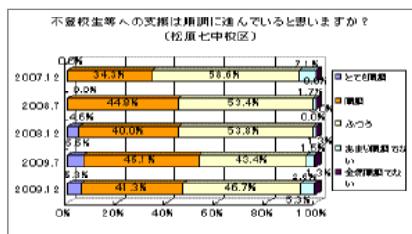
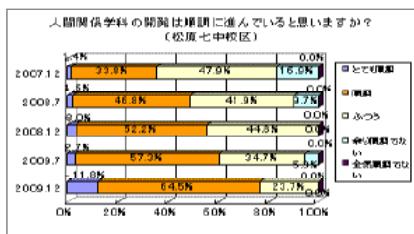
と人間関係を調整する力を育っていく。そのプロセスを通じて内発的なエネルギー（エンパワーされた力）を生み出し、子どもたちの集団内部で、いじめに関わるような事象を排除し、集団を浄化させていく力を身につけていくのである。人間関係学科が、生徒指導の観点で開発的予防的な「ガイダンスカリキュラム」として機能していると考えている。

小中の連携



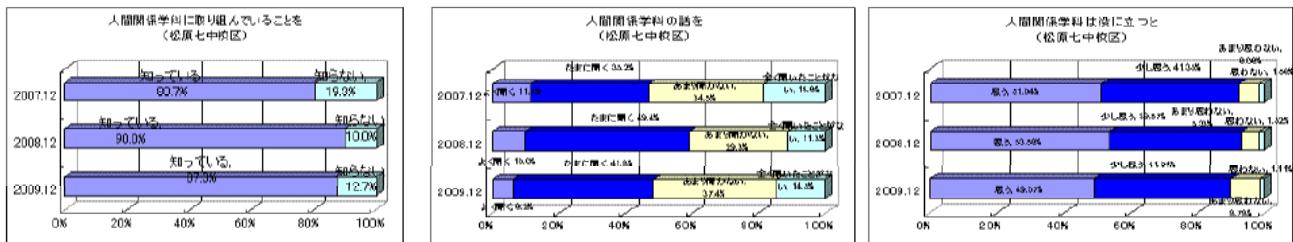
松原七中校区では、小・小（恵我小・恵我南小）どうしの連携、幼（恵我幼）・中（松原七中）の連携、小・中の連携を可能な限り追求している。小・小においては、二校合同の学年会を経て、授業の相互実施や教員交換に取り組むことで、授業内容の精度を高めている。幼・小においては、中学生が幼稚園の授業にファシリテーションリーダーとして入り込み、幼稚園の子どもたちへの「お兄ちゃん・お姉ちゃんモデル」として登場している。小・中においては、小学校6年生と中学校1年生との間でコラボレーション授業に取り組み、小・中の段差を無くそうとしている。左のグラフは、小・中の学校生活調査における学校生活満足度（50点）の数値を並べたものである。平成19年7月調査・平成20年7月調査における小6と中1の数値を見て頂きたい。明らかに満足度における段差があることがわかる。子どもたちが中学校に入ると、新しい仲間との出会い、授業における学級担任制から教科担任制への移行、「勉強」重視の学習スタイル、クラブ活動から部活動への転換など、子どもたちの世界は一気に広がり、楽しさ度や期待感は急激に高まる。しかし、少數ではあるが、人間関係づくりの苦手な子どもは、その上昇についていけず、不登校に陥ってしまう可能性が高いのである。ところが、校区連携の取組により、平成21年7月調査においては、その段差が明らかに小さくなっていることがわかる。しかも中学校においては、中2・中3と満足度が維持されており、連携による成果が出てきたといえる。

B 教職員アンケートから



これまで、平成19年12月、平成20年7月、12月、平成21年7月、12月と恵我小・恵我南小・松原七中・恵我幼稚園の教員を対象に研究開発アンケートを実施した。その中から研究開発の中心課題に関わる3項目（「人間関係学科の開発は順調に進んでいると思いますか？」、「不登校生等への支援は順調に進んでいると思いますか？」、「いじめの未然防止は順調に進んでいると思いますか？」）について見ていくと、本年度12月のアンケートでは、「とても順調」「順調」という答えを合わせた割合は、「人間関係学科は～」は7割5分、「いじめの未然防止は～」については6割弱となった。人間関係学科実施における開発と指導スキルのアップを実感している教員が徐々に増えた。いじめに関する認識についても、積極的認知を進めているにも関わらず、事例自体が人間関係学科の実施により質的に変化したことを見出しているからではないかと考えられる。しかしながら、「不登校生等への支援は～」については、不登校生等の実態というものがさらに悪化していることもあり、進展度がなかなか感じられないという教員もいる。不登校生等の担任であれば、なおさらそう感じることであろう。そのような受け止めを、担任個人が背負い込む形で取り組むのではなく、さらに教員どうし、学校どうしが連携したアセスメントと支援の実施をめざしていかなければならない。

C 保護者アンケートから



平成19年12月、平成20年12月、平成20年12月の3回にわたり、松原七中校区保護者対象にアンケート調査を行った。「人間関係学科に取り組んでいることを知っていますか？」という質問に関しては、平成19年度からは約10ポイント上昇し、90%の保護者の認知を得た。「人間関係学科の話を家庭で子どもから聞いたことがありますか？」という質問では、平成20年度が5割を超えたが、平成19年、21年は5割に達していないし、「よく聞く」という回答が減少している。家庭内のコミュニケーション不足の問題、あるいは、「人間関係学科は役立つと思いますか？」という質問の「思う」の割合の減少などによる保護者の変化なども影響があるのかもしれない。しかし、もう一度原点に返り、地域・保護者を巻き込んだ地域づくりとしての人間関係学科という意識を高めていかなければならぬ。人間関係学科は役に立つと思っていない保護者の意見も参考にしながら、教員自身が自分の心を開き、子どもたちへの良いモデルとなっていかなければならぬと考えている。次のような保護者からの意見を糧に、これからも頑張っていきたいと思う。

- * アンケート用紙に「これからも継続して・・・」と書いてあり、安心しました。ずっとやり続けてください。周りの人を思いやれる子どもになって欲しいと思います。
- * 子どもも「あいあいタイム」が大好きで、人として大切な事をいっぱい教わる大事な授業だと思うので、こえからも続けて欲しいし、できれば増やして欲しいです。今の時代、必要な授業だと思うので、全国に広まればいいなあと思います。
- * 学校の雰囲気がよく、子どもたちは生き生きしている。(学校教育自己診断 平成21年度 89%、平成15年度は67%)

(2) 実施上の問題点と今後の課題

1) 実施上の問題点

校区で一貫した取組をめざし、継続した内容創造のための、校内・学校間の諸会議の設定の難しさ。教員間、学校間における意識のちがいを、プラスに作用させることの難しさ。校区での成果を客観的に評価し、成果を発信しつつ内部に返していくことの難しさ。

2) 今後の課題

松原七中校区としての人間関係学科実施指針をよりどころとして、11年間のカリキュラムに沿った人間関係づくりを、校区で継続して取り組んでいく。
校区として不登校生等支援といじめの未然防止に関わって、校区で一貫した内容と体制で取り組む。
アンケートの実施と効果測定を継続して取り組んでいくためのシステムづくりに取り組む。
人間関係づくりを地域のものとしていくために、地域人材の活用や、地域への発信を行う。
研究開発の内容を積極的に広げていくために、諸研究会への参加や、出張ファシリテーション、学校訪問の受け入れを継続していく。また、松原七中校区研究開発HP

(<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/08koukuenpatsu/koukuhyoushi.htm>)等を活用し、外部と連携を図る。

以上を推進するための研究組織の改編を行い、継続的に取り組むことをめざす。

松原市立松原第七中学校 教育課程表(平成21年度)

全学年で新設教科「人間関係学科」を実施

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	選択教科	総学習的な時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語							
第1学年	140	105	140	105	45	45	90	70	105	35	35	0	30 (-35)	35	980	
第2学年	105	105	105	105	35	35	90	70	105	35	35	70	50 (-35)	35	980	
第3学年	105	85	105	105	35	35	90	35	105	35	35	105	70 (-35)	35	980	
計	350	295	350	315	115	115	270	175	315	105	105	175	150 (-105)	105	2940	

「ほっとスペース」の教育課程

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	選択教科	総学習的な時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語							
第1学年	105 -35	70 -35	105 -35	70 -35	70 +25	70 +25	90	70 -35	70 -35	35	35	0	30 -35	160	980	
第2学年	105 -35	70 -35	70 -35	70 -35	70 +35	70 +35	90	70 -35	70 -35	35	35	0 -70	35 -50	190	980	
第3学年	105 -15	70 -35	70 -35	70 -35	70 +35	70 +35	90	70 +35	70 -35	35	35 -105	0 -60	45 -60	180	980	
計	315 -35	210 -85	245 -105	210 -105	210 +95	210 +95	270	210 +35	210 -105	105	105 -175	0 -145	110 -145	530	2940	

松原市立恵我小学校 教育課程表(平成21年度)

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	外国語活動	総合学習的活動時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育							
第1学年	272		136		102	68	68		102	34	34					816
第2学年	280		175		105	70	70		102	35	35					875
第3学年	235	70	175	90		60	60		90	35	35		60 (-35)	35	35	945
第4学年	235	85	175	105		60	60		90	35	35		65 (-35)	35	35	980
第5学年	180	90	175	105		50	50	60	90	35	35	35	40 (-35)	35	35	980
第6学年	175	100	175	105		50	50	55	90	35	35	35	40 (-35)	35	35	980
計	1377	345	1011	405	207	358	358	115	567	209	209	70	205 (-140)	140	140	5576

松原市立恵我南小学校 教育課程表(平成21年度)

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	外国語活動	総合学習的活動時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育							
第1学年	272		136		102	68	68		102	34	34					816
第2学年	280		175		105	70	70		102	35	35					875
第3学年	235	70	175	90		60	60		90	35	35		60 (-35)	35	35	945
第4学年	235	85	175	105		60	60		90	35	35		65 (-35)	35	35	980
第5学年	180	90	175	105		50	50	60	90	35	35	35	40 (-35)	35	35	980
第6学年	175	100	175	105		50	50	55	90	35	35	35	40 (-35)	35	35	980
計	1377	345	1011	405	207	358	358	115	567	209	209	70	205 (-140)	140	140	5576

1 学校名、校長名

マツバラシリツマツバラダイナナチュウガッコウ

イトイガワタカユキ

松原市立松原第七中学校 校長 糸井川孝之

2 所在地、電話番号、FAX番号 所在地 大阪府松原市一津屋2丁目1番9号

TEL 072-339-2507 FAX 072-339-2517

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
105	3	101	3	99	2	305	11

(支援学級2学級を含む)

4 教職員数

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	18	1			1	1	1		24

1 学校名、校長名

マツバラシリツエガショウガッコウ

ハセガワヒデタカ

松原市立恵我小学校 校長 長谷川秀隆

2 所在地、電話番号、FAX番号 所在地 大阪府松原市大堀3丁目4番17号

TEL 072-332-1212 FAX 072-332-0440

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
96	3	101	3	111	3	100	3	112	3	91	3	611	20

(支援学級2学級を含む)

4 教職員数

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	22	1					1		26

1 学校名、校長名

マツバラシリツエガミナミショウガッコウ

イケダ ススム

松原市立恵我南小学校 校長 池田 進

2 所在地、電話番号、FAX番号 所在地 大阪府松原市一津屋1丁目10番9号

TEL 072-336-6900 FAX 072-336-6901

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
48	2	53	2	56	2	54	2	45	2	39	2	295	14

(支援学級2学級を含む)

4 教職員数

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	16	1					1		20